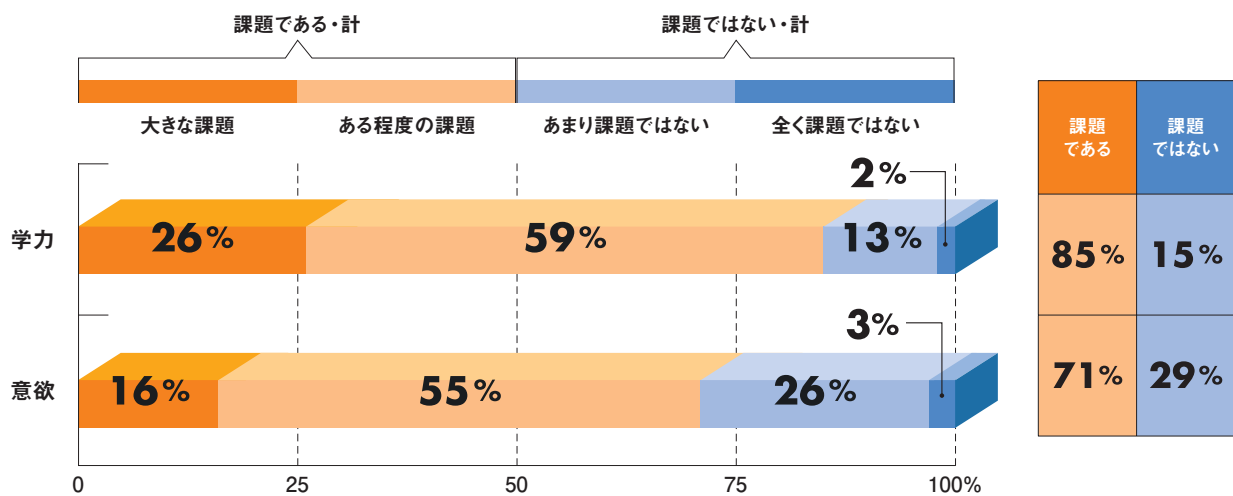


大学入試は「学力+意欲」の多面的評価へ

リクルート進学総研では、高等教育機関、高校生、進路選択に関する各種調査や社外に向けての情報発信を行っています。本号より5回にわたり、調査データから見える進学や就業環境の今をお伝えします。調査の詳細はリクルート進学総研サイトでも公表しています。

リクルート進学総研 研究員 牧田綾子

学生の「学力」「意欲」に課題認識があるか



出典：「入試制度に関する学長調査(2013)」リクルートカレッジマネジメントと東京大学 両角亜希子准教授調べ

独自で進む入試改革 高大接続型の特色入試も登場

大学入試が動いている。政府の教育再生実行会議は昨秋、面接などによる人物本位の選抜を大学側に求める提言を提出した。社会が大きくグローバル化していく中で、正解のない時代でチャレンジしていける人材の育成が求められている。

では実際、大学側はどのような課題認識をもっているのだろうか。全国の大学の学長に調査を行った。

今回の調査では、自校の学生の「学力」に課題があると答えた学長が85%、「意欲」に課題があると答えた学長が7割に上った。また、大学入試改革では、「各大学のアドミッシヨンプリシーに基づく」「総合的な評価」をどう行うかが焦点の一つとなっているが、入試の工夫によって学習意欲を高められると考えている大学が約6割となった。

学習意欲の高い学生を確保するための独自入試については、約7割がすでに「ある(約5割)」「または「検討中(約2割)」との回答があった。特に国立大学では「ある・検討中」が約9割に上っている。実際には、国の議論を待たず、各大学ごとの入試改革が進んでいるのが実情だ。

京都大学が2016年度入試より

全学部で実施するのが、高大接続型の「京都大学特色入試」だ。同校では、大学教育が高校教育からの積み上げを前提としている点から高大接続を重視。さらに、ペーパーテストで得点を取るためだけの受験勉強は受動的学習であり、研究型大学として同大学が重視する「自ら課題を発見し、チャレンジする」という自発的な学びとは異なるという課題意識をもっていた。こうした点から、高等学校長等の作成する「学業活動報告書(仮称)」などの書類審査に面接や口頭試問などを組み合わせ、高校での幅広い学習に裏付けられた総合力と学力、志を重視した入試に踏み切った。

東京大学も2016年度より、初の推薦入試を実施。「タフでグローバルな東大生」の育成には、多様な学生が互いに切磋琢磨する環境を作ることが重要との考えからだ。私立大学では早稲田大学で2014年9月から「新思考入試」がスタート、国際基督教大学では2014年度からセンター試験の廃止が決まっている。

いずれも、従来のような知識偏重型の入試対策では対応できない入試だ。また、意欲を重視しながらも一定以上の学力を必要としている。今後は、社会・大学・高校の三位一体で、どうインベーシヨン人材を育成していくかが問われてくるだろう。